

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから  
専門的にお話しいたします!

# わんにゃの健康最前線

## 「ねこちゃんのおしっこの話」



京都中央動物病院 院長 獣医師  
村田 裕史 先生

寒い季節になるとハロウィン、クリスマス、お正月やバレンタインデーなど色々な楽しいイベントが盛りだくさん。寒さが苦手なねこちゃんにとっては困った病気が増える季節なんです。

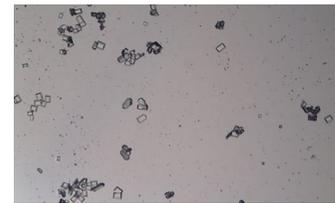
### 症状

症状として多いのは、何度もトイレに行く頻尿です。また、おしっこの色が赤くなる血尿も一般的です。そのほかには排尿時に鳴き声をあげる排尿時の疼痛や排尿のときに息みすぎて嘔吐したり、ぐったりと元気がなくなったりするなど様々な症状が認められます。

### 診断

身体検査では硬く大きくなった膀胱が触知されることが多くあります。逆に尿道閉塞を生じておらず、おしっこが出てくる場合は、膀胱は小さく触診されることとなります。この2つのパターンでより重症なのは前者。尿道閉塞が生じると、おしっこが排泄できなくなり、時間経過とともに尿毒症が進行していくためです。この尿毒症が進行すると、神経症状である痙攣、意識の消失、沈鬱、消化器症状などが出てきます。

軽度の膀胱炎であることが明らかであれば例外ですが、多くの場合、血液検査を行います。この血液でもっとも重要な尿道閉塞から腎臓数値が上



(図1)



(図2)

昇していないか? 電解質のバランスが大丈夫か? を確認します。このデータに基づいて輸液療法を行います。尿道閉塞が生じている場合は尿道にカテーテルを挿入し、解除を実施します。この処置は、閉塞の原因の診断に重要です。また、同時に閉塞解除は治療としても非常に重要です。これにより尿の排泄ができるようになり、輸液療法と組み合わせることによりねこちゃんの状態を安定化することになります。尿カテーテルより採取できた尿を分析した結果より、閉塞の原因として、ストラバイト結晶(図1)やシュウ酸Ca結晶(図2)が診断できることがあります。しかし、この結晶が存在していても、血液などが凝固して閉塞している場合などもあります。血尿の程度や尿比重、尿

PHなどが治療開始の段階で把握することも大切です。

ここまでは迅速な診断と治療に必須の項目ですが、大きな結石が膀胱や腎臓に存在している可能性や、この疾患の治療方法や予後を知るために、X線検査やエコーなどの画像診断も重要です。

### 治療

この疾患の治療としては、尿道が閉塞している場合、尿道閉塞の解除と輸液療法が非常に重要です。また、この疾患や痛みを伴うので、ねこちゃんのストレスを緩和するために鎮痛剤や鎮静剤なども状況に応じて積極的に使用することが重要となります。血尿が重度な場合やカテーテルを挿入する作業などのため、感染コントロールのために抗生剤が必要となるケースもあります。また、炎症の緩和のためにNSAIDs(非ステロイド消炎鎮痛剤)もしくはステロイドなどの抗炎症作用がある薬剤の使用も考慮します。

多くのケースでこのような内科治療により対応可能ですが、この疾患の再発が頻繁である場合、カテーテルに

よる解除ができない、ペニスが損傷している場合、などでは外科手術が必要となることもあります。

### 予後

この疾患は軽症から重症まで非常に幅があります。軽症なケースでは外来治療で十分ですが、重症なケースでは入院し、集中的な治療が必要となります。さらに、尿毒症が重度であるときや高カリウム血症が続くと、ねこちゃんが死亡するリスクも高くなります。このような重症なケースでは、腎臓へのダメージが残り、慢性腎臓病へと移行するケースもある点も注意していく必要があります。

この疾患は重症な場合もあり、緊急疾患として迅速な対応が求められることが多いですが、それ以上に悩まされるポイントは再発が多い点です。診断や処置はほとんどのケースでうまくいくことが多いのですが、この再発率の高さにはいつも悩まされます。

これは治療する獣医師としても、患者さんであるねこちゃんに、そして、飼い主さんにとっても本当に頭の痛い話です。この病気はねこちゃんの体質や

## Stop! ねこちゃんのおしっこの病気

### ～再発防止にできること～

- 1 水分補給** なるべく水を飲ませましょう。
- 2 トイレの数を増やす。そして、トイレは清潔に。**  
飼育しているねこの数が多いと病気の発生率が増えるため、ねこの数よりトイレの数を増やすこと。
- 3 フード変更を検討。**  
このねこの泌尿器病に対応したフードを使用すると、塩分などを強化により飲水が増えるなどの効果が期待できること、また、尿PHの調整などの効果が期待できる。
- 4 サプリメントなどの使用を考慮。**  
フードと同様にサプリメントも効果が期待できる場合もあり、処方フードが嫌いなねこちゃんにも対策してみよう。

性格、そして、生活習慣などに起因しているもの。ねこちゃんの体質をかわせることはできないですが、少しでも後述の再発防止策を実施し、再発率を下げていくようにしたいですね。

### おわりに

このねこちゃんのおしっこのトラブルは緊急となる場合があります。おしっこの異常に気がついたら早めに動物病院へご相談を検討ください。

〈お問い合わせ〉 京都中央動物病院 電話 **075-821-1020** 京都市下京区柿本町582-3 9:00~20:00